

第2回全国交流大会の報告

「考える会」の第2回全国交流大会は、去る11月15日（土）に川崎市立労働会館で開催された。参加者は約80名。決して多数とは言えないが、全体を通して活発な議論が展開された（文責は事務局）。

交流会次第

第1部 全体会

○開会挨拶 加藤三郎代表

○パネルディスカッション

テーマ：支部・部会活動の現状と課題

コーディネーター：藤村コノエ

パネラー：高橋次郎（四国支部）

鳥羽孝司（古河支部）

筑紫みずえ（ひなの会）

柳沢賢一郎（制度部会）

鈴木茂（環境芸術部会）

○ハイ・ムーン先生によるマンガ環境講座

講師：高月紘さん

（京都大学環境保全センター教授）

第2部 分科会

○第1分科会 地域で活動する人の分科会（支部）

○第2分科会 テーマにこだわる人の分科会（部会）

○第3分科会 全国に仲間を増やす分科会

第3部 全体会

○各分科会の発表

○閉会挨拶 加藤三郎代表

第1部 全体会

●開会挨拶 加藤三郎

お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。今年は、支部や部会の代表者によるパネルディスカッションを予定しています。その席で皆さんと意見を交換できればと存じます。

昨今は世界全体が単に環境の面だけでなく、経済、社会、政治を含めてまさに行き詰まりの感を深めております。この行き詰まりを打破する大きな力の一つはNGOです。今日のこの会を通じて日本の世の中にどう働きかけていくかの知恵を出していただきたく存じます。同時に、この会の新しい方向を示唆していただければ幸せです。

●パネルディスカッション

各支部と部会の紹介

藤村（司会）：それぞれどういう経緯で支部や部会が生まれ、現在どういう活動をなさっているかをご紹介します。

高橋（四国支部）：今から数年前に笠誠一さんと加藤代表がふれあい、高知県に在住する何人かの有志がいろいろな方に声をかけてこの会が発足しました。

会の具体的な行動としては、ストップフロン高知という団体に所属して、古い冷蔵庫などからフロンを回収する作業をやっています。

私達は、温暖化やオゾン層の破壊に危機感を感じていても、自分がすぐにできる行動は限られています。会員のうち都合のつく方だけでも手取り早くできるということで、フロンの回収を始めたわけです。



左より、高橋次郎さん、鳥羽孝司さん、筑紫みずえさん、柳沢賢一郎さん、鈴木茂さん

鳥羽（古河支部）：私たちは加藤代表の同級生ですが、その4人が発起人になり、半年間の準備期間を経て4月に発会しました。そこで初めて、環境を自分の問題として引き受ける実感がわきました

た。これは大きな自己発見でした。

発会式に思いがけず市長が来てくださりまして、責任の重大さを改めて認識しました。支部の進め方については、最初は地道に勉強でもしようということになりました。“地球規模で考え地域で行動する”という言葉通りなんで、2カ月に1回3時間程度公民館で勉強会をしています。

今のところ会費は無料、皆さんが寄ってきます。また、古河市のローカル紙に記事を発表すると、結構反響があります。持続性を第一に活動しているかと思っています。

筑紫（ひなの会－女性部会）：環境問題は生活に密着しており、抽象論ではなく具体的に何かを積み重ねていくということで、より生活に密着している女性に呼びかけて始まりました。

この会は女性が中心ですが、男性も大歓迎です。私達は、とにかく言いつぱなし、聞きつぱなしの自己満足に終わることなく、具体的な成果をあげていくことをいつも目標にしています。

やりたいテーマは、食、環境教育、金融などです。金融と環境の結びつきは不思議に思われますが、ひなの会にいる金融業界の人達から、金融の流れを変えることで産業構造に影響を与え、社会の流れを変えられる。欧米で盛んにやられているSRI（社会的責任投資）型の環境ファンドのアイデアが紹介されました。

これは、預貯金や株式投資に一定の投資基準を設けて、環境に悪影響を与えたり、社会正義に反する行動をとる会社には投資をしない、あるいはそんな会社の株を売りに出すなどです。

ひなの会では、金融機関104社にアンケートを行い、その結果を分析中です。環境問題に金融の視点を取り入れたのは日本では新しく、これはよかったですと思っています。

柳沢（制度部会）：制度部会はテーマが非常に堅く、抽象的で難しい面があります。6月以降毎月1回開催し、今までに5回集まりました。

最初の3回は何をテーマに議論するかが大きな
1997年12月号

問題でした。テーマを具体的にするために、例えばゴミ問題に焦点をあてて、その範囲で制度の問題を考えようという意見もあれば、根本的な文明の問題を考えてそれに関連する制度の問題を考えようという意見もありました。

基本的な考え方としては、倫理グループの議論を土台にするという意見もあれば、地球は有限というようなインパクトのある表現を考え方や議論のベースにしようという意見もありました。対象については、グローバルな視点を持ちながらとりあえずは国内問題をやることになりました。

まず基本的な原則、議論のテーマ、部会の進め方、制度をぶつける対象の4点ぐらいの項目についてアンケートをとり、皆さんの考え方を大雑把にまとめてみましたが、議論はなかなか収束せず混沌としていました。

その時に出たのが稲盛さんと関本さんの例の論争でした。われわれの部会は足るを知るという、稲盛さんの考え方に近いスタンスでものを考えようという感じになっています。

具体的なものとしては、自動販売機を取り上げました。これは全国に膨大な数があり、エネルギーを無駄に使っているという観点から勉強を進めています。その上で制度という観点から議論しようという、やっとそこまで来ました。

鈴木（環境芸術部会）：私達の部会は20名程度で10月に発足し、今まで2回会合を開きました。予想外に女性が少なく、男性が中心でして、メンバーは美術、写真、映像、文学、詩、演劇などが好きな人達が集まっています。始めてみると、初回から議論が白熱しました。部会には地球環境美術研究所のメンバーが多く、この機会に「考える会」の会員に入ってほしいと思っています。

環境も芸術も抽象的な概念に思われますが、それについてのみんなの反応が似ています。まず言われるのが「わかりません」、次に「勉強いたします」です。しかし、現実には、皆ある程度理解しており、芸術でも環境でも感ずればいいんです。

第2回全国交流大会

インプットでなく、アウトプットが大切です。

簡単な絵、詩、劇でもいいから何かを作りましょう。環境芸術部会は一人に帰るという意味で個人、何かを作るということでアウトプット、それからリアリティの3つを切り口としてやりたいと思っています。

私は5年前からこの地球環境と芸術という分野をやっておりますが、まだ日本の中では確立したものはありません。環境の問題も芸術の問題も、核となる部分は心であり美です。美しさを確認して何かできないだろうか。ですから環境芸術部会の取り組みは環境をテーマにして芸術が何ができるだろうかという形で取り組んでいきたいと思っています。キーワードは感動です。

今の課題は？

藤村：ありがとうございます。次に活動をやる中で今困っていること、課題があったらお知らせ下さい。

筑紫：最初は関心が高かったんですが、金融のことを本格的にやり始めると人数が減りだし、最終的には限られた人達だけになってしまいました。

新しいシステムの構築を目指して多くの人に訴える以上、今のシステムの担い手である行政、大企業にも耳を貸してもらえよう話をするしなければならないのです。

新しい視点が必要なのですから、取っつきにくくてもちょっと我慢して会合に出ていただきたい。メンバーを獲得するのが一番の問題です。

藤村：今お話にもありましたが、最初はわっと集まるんですがちょっと難しくなると来なくなり、人集めが大変で活動する人が決まってしまう。その点制度部会はどうですか。

柳沢：同じような悩みがあります。制度というと、一番上は憲法の問題から身近な制度の問題までいろいろあり、なかなか話が絞りきれない。どうしても抽象的になってしまうところから、現実に行っている方は少ないです。

そのためには、机を囲んだ議論だけでなく、例えば自動販売機の工場見学をしたり、それを規制している自治体に行って話を聞いたりすれば、興味もだんだんわいてくると思います。

藤村：非常にいいアイデアです。私の言葉で言えば体験なんですけど、そういうことをどんどんやっていくと人も関心を持って、より集まってくださるのではないのでしょうか。

鳥羽：僕は組織が肥大化するのを恐れています。この間市役所の職員組合から入会について問い合わせがありました。寺子屋風がよろしく、規模が大きくなるのはよくない。大集団で押し掛けられたら勉強会どころではありません。

藤村：それは珍しい悩みです。どこに行っても人が少ないとか、広がらないと考えているのに、広がるのが困るというお話です。

鈴木：真剣になって人を増やすのもいいんですが切り口を考える必要がある。地域を限定したりすることがこういう運動では必要だと思います。

フロアの意見

藤村：会場の方にお伺いします。今までのお話を聞いて、アイデア、質問、ご意見がございましたら出してください。

伊藤：一番大事なのは、一般の方にせめてわれわれと同じ価値観を持ってもらうことです。環境問題の重要性を伝えるべきです。視覚に訴えるものでコンパクトなものがワンセットあるといいと思います。地域の集会に環境問題の重要性を総合的にわかってもらえるようなグッズが欲しい。

藤村：そうですね。この後、ハイ・ムーン先生のマンガ環境講座がありますが、漫画のようなものもいろんなところで活用するといいですね。

鈴木：今の伊藤さんのご意見の通り、視覚に訴えるのは相当効果があります。教材という形でわかりやすいパネルを作ることは今後必要だと思います。ぜひ協力させてください。

柳沢：昔「日本沈没」という小説があり、それが

第2回全国交流大会

映画化されてあれだけ客を動員しました。あれと同じ手法が使えないはずはないと思います。したがって、環境がからんだ小説を小説家に書いてもらって、適当なプロデューサーに映画化してもらう、こういう考え方も有効ではないか。

高橋：気楽に参加できるようなこともあった方がいいですね。難しい話をしないと参加できないようでは広がりません。楽しいものも抱き合わせでやるようにしてもらいたい。

藤村：「考える会」は事務局の中に「考える会」なんだから考えようという意見が多いんですが、私は考えながら行動し、行動しながら考えるのが本当の「考える」じゃないかと言うんです。

これからの抱負

藤村：最後に一言ずつ、これから支部・部会でどんなことをやりたいかお話しください。

高橋：支部の会員同志の意志の疎通をはかりたい。呼びかけるのに今のシステムでは問題がありますが、それは次の機会に話します。

鳥羽：人を集めるのに大きく網をかぶせる方法もありますが、一本釣りで釣り上げるぐらいの悠長な会の展開をなさったらいかがでしょう。

筑紫：環境問題は若い人やその人達の子供に関わってくるので、特に若い人達に重点的にこの会のことをお話ししていこうと思います。

柳沢：私も先ほどの藤村さんの意見同様、議論するだけでなく、外に出て議論を広げたい。

鈴木：私は日本人は自然の中の美しさを世界中で最もよく感じている国民だと思います。自然の中の美しさ、それをどのようにして日本に、世界に普及していくかということについて情熱を持って今後とも進めていきたいです

藤村：ありがとうございました。この後、環境の漫画で有名な高月先生にご登場いただきます。楽しみながら環境問題を考えたいと思います。

●ハイ・ムーン先生によるマンガ環境講座

1997年12月号

(高月紘先生が素敵な漫画をスライドで映写しながら環境問題を平易に楽しくお話された。紙面の都合もあり、ここでは二、三の漫画を掲載するにとどめる。)



高月 紘さん

●各分科会の発表

(三つの分科会に別れて討議を行ない、引き続き全体会で各分科会の発言要旨が報告された。ここでは、その発言要旨のうち重要な事項について述べることにする。)

第一分科会(支部に関する分科会)では、活動の財源をどうするか、行政との関わりをどうするか、という二つの問題が提起された。

財源については、できるだけ行政から独立したいという考えから、地域活動の発起人が活動資金を出しあい、参加者から金をいただかない仕組みをとった事例が報告された。それに対して、会費を集めて行動する方が永続するのではないかという意見もあった。

行政との関わりについては、加藤代表からNGOとしては独立性、多様性、先進性の三つを心掛けるべきだとの指摘があった。

参加者から出た次の二つの意見は興味深い。一つは、環境活動に携わる人には高齢者が多く、活動や発想がマンネリ化する傾向がある。だから、それを乗り越えるのに若い人の新しい知恵を模索する必要があるという。

もう一つは、行政に対してきちんとの申す心構えがありさえすれば、行政からのお金に抵抗感

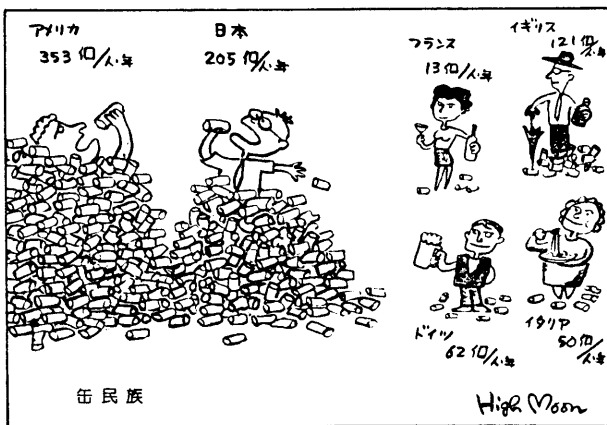
第2回全国交流大会

を持たないですむという意見である。

第二分科会（各部会についての分科会）では、会員個人の専門性をうまく生かすこと、会を体系化して機能を分担すること、たとえば広報の部会や政策提言の部会をつくる案などが出された。

また、部会のテーマは、企画段階から会員の意見をきくこと、専門性をうまく使い、他のNGOや団体との違いを出すことが大切で、そのためには会員名簿に各人の専門や興味のある分野を明示することが望ましい。

この会のように、専門家と一般市民が同じ場で議論できる会は他にない。だからそこで出た意見は斬新だが、それを政策提言として訴えるには、中途半端ではなく具体的なものを作っていくこと。アンケートを取る場合は、単に意識調査だけではなく、教育的な効果ができるようにすべきだ。



作者註：日本の飲料缶の消費量251億缶/年は全ヨーロッパの168億缶/年より多いのである。(1989)

ゴミック「廃貴物」第3集より

第三分科会（仲間を増やす分科会）では、仲間を増やすためにはまず自ら行動し、その上で友人や関心がありそうな方にすすめること。

会報については、内容が高度で理念的すぎる、市民感覚での編集を望むという意見があった。字ばかりでなく、目に訴えるイラストなどが欲しい。横組みでなく縦組みがいい。会の宣伝グッズも兼ねて、加藤代表の風（巻頭言）を集めた小冊子を作ってほしいという希望もあった。読者同志が意見を交換できる場が欲しい。写真がもっとあって

もいいんじゃないかという意見もあった。会の会員増加のためにはプロの意見をきくこと。

ある若い人が環境問題に関心をもったきっかけは、自分が生きている間に地球が大変なことになりそうだということ。だから、その辺を訴えるのが若い人に効果的ではないかと言う。

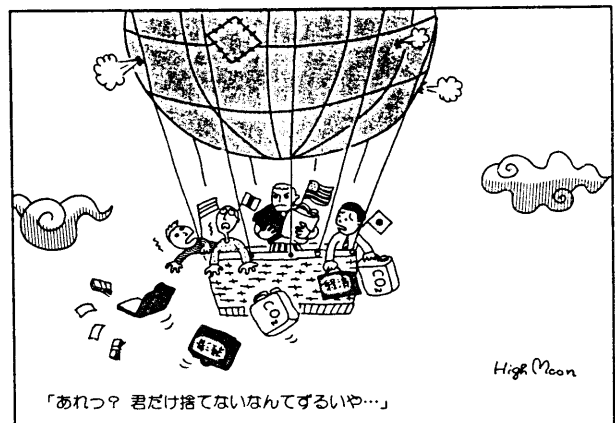
●閉会挨拶 加藤三郎代表

冒頭でも言いましたように、社会の現在の行き詰まりを打破する大きな力の一つはNGOですが、日本ではまだ正当に評価されていません。財政基盤も貧弱です。パチンコの30兆円とまではいなくても、せめてNGOが生き生きと活動して日本社会の不可欠な部分になるようにしたい。

今日は皆さんからいろいろ厳しいご意見を頂き、ありがとうございました。「考える会」は発足してから4年少しと歴史も浅く、知恵もまだ十分とは言えませんが、スタッフ一同がんばっております。会がここまで来たのは皆さんの暖かいご支援のおかげです。今後もさらに一歩進んだご支援をお願い申し上げます。

●懇親パーティー

夜は有志が集まって、懇親パーティーが開かれ、賑やかに意見が交換されました。なお、この場では会員の山口京太さん率いるアンサンブルT A Oの皆さんに素晴らしい演奏を披露していただきました。



ゴミック「廃貴物」第3集より